Special Talk 特別対談

上田清司 × 蜷川幸雄

埼玉県知事
Kiyoshi Ueda

(財)埼玉県芸術文化振興財団芸術監督・演出家
Yukio Ninagawa

2006年1月、(財)埼玉県芸術文化振興財団の芸術監督に就任する蜷川幸雄が、埼玉県知事 上田清司と芸術劇場にて、芸術感や劇場のあり方など、埼玉における芸術文化の展望を熱く語り合いました。

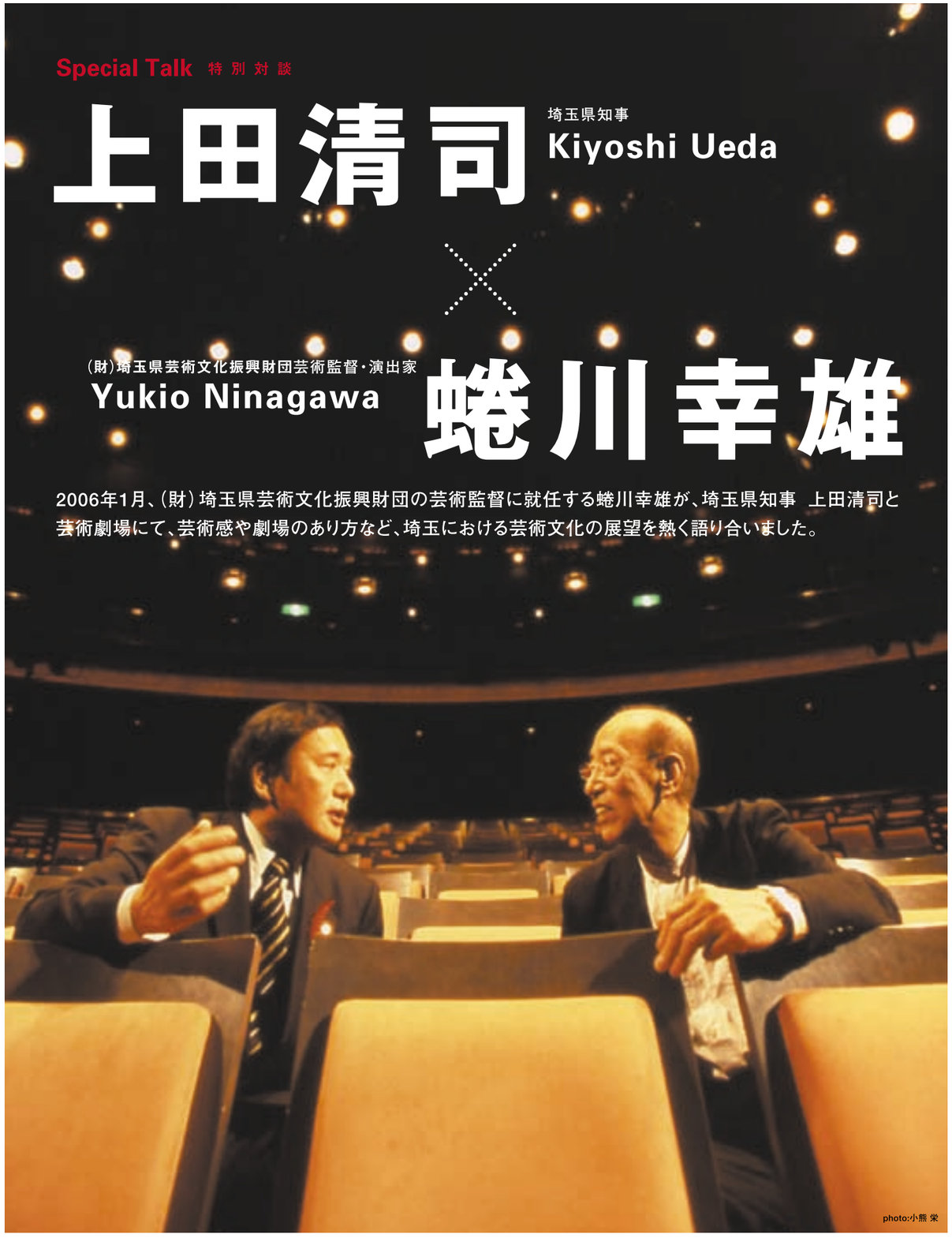

photo:小熊 栄

芸術的にすばらしく、大勢の人に観ていただける劇場に

蜷川　この度は芸術監督に招いていただきましてありがとうございます。

知事　こちらこそ本当にありがとうございます。もともと蜷川さんは「彩の国さいたま芸術劇場」のシンボルになっていらっしゃいましたので、正式に芸術監督になっていただき、大変ありがたいと思っています。

蜷川　県民の皆様に喜んでいただければうれしいですね。まずは劇場が愛されないといけないので、それをフォローしてください。

知事　はい、もちろんです。

蜷川　芸術的にすばらしく、なおかつ大勢の人に観ていただける劇場であれば良いなあと思います。難しいのは、大勢のお客様が入るから芸術的に優れているとは限らない。また、入らないから優れていないとも限らない。その両方を相対化しながら、では何が優れているのかという事をジャッジしてくださる皆様が増えると良いと思っています。

また、一方で僕がやろうとしていることは、東アジアの日本に造られたこれだけ優れた劇場が、世界的に普遍性を持っているということを証明することなんです。

知事　そうですね。私たちも、この劇場を造る時には贅沢すぎるのではないかとか、色々な話がありましたが、思い切って造って良かったと思います。もう事実があり、存在があるので、これを最大限に生かさなければいけないと思います。

蜷川さんのように、本当に天才的かつ想像力のある芸術監督に、これからも色々な事業を展開してもらい、付加価値をさらに付けていただければと思います。

蜷川　僕は、川口市生まれなので目線は低いです。ですから親父やお袋達にでも分かるものを創りたいと思っています。しかしそれだけでなく、少数の人に愛される作品があっても良いとは思っていますが、それは小さな公演でやれば良いと思います。

僕は祝福されないで演出家になりました。初めて劇団を作った時には200万円の借金をして作りました。その借金は1年後に返しましたが、その劇団を解散し、次にもう一つ劇団を作った時は1人10万円づつ、4人が集まって40万円でスタートしました。私は、そうして来たので、お金の大切さは分かっています。もっとはっきり言うと、税金を使わせていただいて仕事をすることの怖さと、公共性というものをどのように捉えなければいけないかについても、少しは分かっているつもりです。大金のかかる時もありますが、そのあたりのバランスは信じていただきたいと思います。

知事　昨年度から財団の経営者として竹内理事長が来られ、チケット収入や民間からの協賛金などの自主財源と県や国からの補助金との収支バランスの目標値を設定したことで収支が良くなってきました。これからの課題は、収支の悪いものでも意義のあるものは思い切ってできるようにするために、前年に努力して残したお金を使えるような仕組みづくりが大切だと思います。また、場合によっては蜷川さんの方から理事長に「少し採算ベースを度外視して、これをやるから特別に税金を使うように知事に言って欲しい。」というお話をしていただいてもかまわないと思っています。県民と議会の理解を得られる範囲内で私なりに判断したいと思います。

蜷川　それはとってもありがたいお言葉です。そういう知事のご意向を受け、責任をもってやっていきたいと思います。

街の色々な人が応援してくれる劇場に

蜷川　英国の国立劇場は大中小ありますが、3つの劇場の入口がほぼ同じで、ロビーがあって、そこで音楽を演奏していたり、カフェがあったり、